

編集 後記

公衆衛生分野の研究は、様々なテーマや手法で行われていますが、その眼差しは、一貫して社会的に脆弱な人々へと向けられているように思います。昨今注目されている population approach においても、健康の社会格差を考慮に入れた「社会的弱者に特化したポピュレーションアプローチ」や「傾斜をつけたユニバーサルアプローチ」が提唱されています。

第72巻第4号では、原著4報、特別報告1報、レター1報が掲載されています。特別報告は、本学会の「公衆衛生モニタリング・レポート委員会 障害・難病グループ」による活動の報告です。この報告では、COVID-19 パンデミックにおいて、生命や健康の維持が脅かされた人々（障がい児・障がい者、難病患者）のニーズや支援について、具体的な課題が提示されています。この報告に呼応するかのように、野中らはCOVID-19 パンデミックにおいて活動が制限された高齢者のグループ活動を再開・継続する要因について検討を行っています。一方、濱田らの研究では、精神医療の利用者自身のセルフアドボカシー（「自分の気持ちや要求を発言することで自分自身の権利を守り、生活を変えていくこと」）を測定する尺度の日本語版を開発しています。社会的な脆弱者という範疇に収まることなく、社会的な役割を担う主体としての人生を展望していくこと、それを後押しする研究が生まれることを期待させる研究です。

第4号の特徴は、政府統計データを用いた研究が2報掲載されている点にもあります。渡邊らは、医療扶助実態調査など複数の調査データを用いて、生活保護受給者における入院受療状況の特徴について、疾患分類別に検討しています。一方、田中らは、国勢調査と人口動態統計死亡票の匿名化個票データをリンクして、日本の教育歴別死亡率を都道府県で比較しています。どちらの研究も既存の大規模データを分析し、生活保護受給、低学歴などの社会的脆弱さと健康との関連に切り込んでいる点が大変興味深いです。従来、生活保護や社会福祉サービスユーザーを対象とした調査は、量的解析に耐えうる回答数を得ることが難しく、科学的なエビデンスが蓄積されにくいという現状がありました。渡邊ら、田中らの研究は、そのような限界を超えた新たな研究の世界を見せてくれます。また、SAEKI によるレターでは、公衆衛生・社会医学における専門職教育の新たな方向性が示されています。公衆衛生の未来には、研究と実践の豊かな循環が不可欠だということを再認識させられました。

第4号は、変化する社会と健康課題を前にして、公衆衛生の研究・実践が向かう希望に満ちた未来を予感させてくれます。皆様は、どのように感じましたか？

（谷口麻希）

次号予告（第72巻・第5号）**原 著**

都市・地方の別および移動負担別にみた小児がんの実態：全国がん登録データに基づく受療動態と死亡率の分析……………筒井杏奈，他

資 料

医療・介護施設のヘルスプロモーション活動の実態と促進・阻害要因の検討：一公益法人を対象として……………川畑輝子，他
0歳児の多胎児を養育する父親の健康状態と生活状況：国民生活基礎調査データを使用して……………三好しのぶ，他

日本国内で実施された産婦の抑うつや不安を軽減する支援方法とその効果：文献レビュー……………羽入田彩花，他

若年性認知症者の家族介護者が診断後初期に支援を求める際の心情……………戸村友美，他